

| | |
|------------------|---|
| Title | Thompson ; World history from 1914 to 1950 |
| Sub Title | |
| Author | 鈴木, 泰平(Suzuki, Taihei) |
| Publisher | 三田史学会 |
| Publication year | 1956 |
| Jtitle | 史学 Vol.28, No.3/4 (1956. 3) ,p.151(429)- 156(434) |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560300-0151 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

本書の内容はここで終つてゐる。以後の十字軍の研究も、本叢書以外から公刊せられると言う。これらの諸冊は、數多い十字軍研究書中であつて、十字軍と言ふよりも十字軍士の内的精神史として特異の性格を有し、一つの基準的研究と看做されるであらう。

(森岡敬一郎)

Thompson; World History from
1914 to 1950

1954, London

戦後流行した世界史の記述は幾多の問題を含みつゝもともかく一應の格好を整えて來たことは事實である。編年及び地理上の區分等については先づ一通りの定つたコースが置かれたと云つても過言ではないと思ふ。然し世界史の記述に當る歴史家の態度方法については必ずしも同様ではない。對象の廣さから見れば勿論多くの問題が提起されるのが當然であるが世界史家の扱ふ對象或ひは史的方法と云つたものに關する反省が存外少かつたことも事實である。此の點に關して若干の史家例えばカー、アロン、トムソン等は僅かではあるが世界史に思ひを致してゐる吾々に光明を與えてくれたと云えるのではないであらうか。此處に紹介するトム

ソンの世界史は斯様な意味に於いて云はば實驗的な一つの世界史を打ち建ててゐるとも云えよう。

トムソンの主張を序文を借りて紹介すると先づ少くとも二十世紀の三十年代以後の最近世ともなれば、國別乃至は大陸別の歴史を描くのは無意味であり、地球全體が一つの綜合的な記述になるべきであるとし、年代記的な所謂個別的記述は近代の世界史に關する限り問題にならないとしてゐる。これによつて世界史の構成は、時代別に關する限り統一的な體裁はとり得ず、少くとも近世に關しては全世界が一つの綜合的な視點から捉えらるべきであり又世界史の構想を抱く以上、二十世紀以降の近世のみが世界史の名に値するものだとされてゐるのである。即ち、トムソンは世界史と云ふ以上は、各大陸間又は、各國家間の恒久的且恒常的な相互關係が創造される時代のみが記述の對象とされるべきであり、此の意味に於いて斯る相互關係を創らなかつた時代の事件は全て記述の對象にはならず結局、最近二百年間の年代のみが斯る關係を創つた意味に於いて唯一の對象であり、此度にこそ世界史が成立すると云ふ。具體的にはヨーロッパ勢力の擴大とその全世界に占める優越及び、そのヨーロッパ自身及び他の五大陸への影響が對象になると云ふのである。換言すれば、近代文明及び通信組織の發展による時間概念の變化それ自體も世界史の構成記述の綜合的性格を強化して居り。特に現代史を按ずる場合、フランスの

史家がフランスを書くのにプロヴァンス、ブルゴーニュ等の個々の地域を個別的に書かないと同様、世界史家は當然、各大陸國家の動きを一つのものとして書くことを、要請されると云ふのである。トムソンは更に國家乃至は教會の歴史が單なる地方的事件や僧侶の傳記の集成では無意味であるやうに全般のコースに關聯づけられてこそ世界史は生きてくるものであるとし、此の點に於いて史家に困難ではあるが、周知の方法は世界史家の場合でも同様であると述べ、世界史家も結局他の領域を扱ふ普通の史家とは本質的には異なるものではないとしてゐる。トムソンは此處で更に結局問題は近代世界史に最も同質的な明確な概念規定の必要なることを述べ近代世界史に關しては、各大陸間の相互依存性が本質的な支持要件になつてゐるとし、大陸間の事實上の依存性と關連性こそ近代世界史固有の特徴であると共に世界史構成の基本理念でもあると云ふのである。従つて、トムソンの説く如く、世界史家の任務は如何にして斯る事態が起り、如何なる表れ方をし人類に如何なる影響を與へたかを記述する點にある譯である。トムソンは二十世紀特に一九一四年以後の世界史記述の主要テーマを以上の如く規定した後、世界史家の検討すべきポイントとして(一)科學技術、社會經濟組織及び國際貿易、投資等の發達による物質的條件の變動(二)其の性格意義に於いて超國家的國際的な思想の全般的な潮流(三)世界的な指導者(四)以上の條件を最も端的に表はしてゐる

二つの大戰であるとし、此れ等の要件は基本的には全ての歴史的變化の裏に同様に秘められてゐるものと變らないものであり、此の點に關する限り世界史家の方法は窮局的には他の史家のそれと變らないと述べてゐるのである。要するに近代史家の周知のテクニクをより廣い範圍に應用し、一つである此の世界には邊境がないことを銘記すべきであり、地球全體が焦點だとしてゐるのである。トムソンは次いで近代世界史家の出會の固有の困難な問題として材料の過多と視點の確立及び主題解釋に於けるプロポーションを擧げ、世界史研究の意義を最近世の世界の解明に歸して序文を終えてゐる。トムソンの主張に關しては必ずしも新奇なものはないが反面又世界史家の據るべきポイントを好く衝いて居り、少くとも最近世研究に關しては一應の鍵を與えてゐると云ふべきであらう。トムソンは此の本書を以上の諸點を意識してとり擧げた實驗的な世界史の一記述に過ぎないと述べ、一九一四年直前の事態から要領の好い描寫を展開する。描寫は先づ一九一四年の政治情勢の分析に始まり、主として英帝國の世界的な經濟的、植民的發展を粗述する。此の章に於いて目につくことは中近東諸國のナシヨナリズムとヨーロッパ・インペリアルリズムの交錯を見事に捉えてゐる點であり、植民主義の必然の結果としての先進國の後進國への侵透は所謂オーバー・オール・パターンを一九一四年に作り上げたとしてゐる。三B及び三C政策は此の點に於いて簡潔

な説明を支えられてゐると云へよう。次いで説明はヨーロッパの人口移動と貿易、投資に移り一九一四年のヨーロッパ及び他の大陸諸國は事實上、相互に經濟的な依存關係を創り一つの市場、一つの經濟的な有機體をなしてゐたと云ふクラブハムの説明をもつて巧みに説明を進め、此の單一市場外の別箇の市場を求める動きがアジアに向けて行はれてゐたとして第二次大戰への有石を行つてゐる。次いでトムソンはグラスゴウ、ストックホルム、ダンチヒ、トリエスト、フローレンス、バルセロナを結ぶヨーロッパのインナー・ゾーンとその周邊アイルランド、イベリヤ半島、イタリア、ドイツ東方のアウトター・ゾーン及び、更にその外側のバックワード・ゾーンとに區別して世界を考えた一フランス人の區別に従いつ、巧みに産業技術の發展、工業社會の變化、政治制度の變動、通信、機構の發達、生活様式、主要思想の動向を説き、極端な實證主義の抬頭とそれに對する理想主義、超人思想の反動及び、宗教的信念の稀薄化を指摘して思想的には一九一四年は一種の混迷状態にあつたと説く。第二章第一次大戰の頃ではトムソンは、此の戰爭は國民集團の戰であり、その破壊的性格は凡ゆる歴史に先例を見ないものであり、又當初の意圖又は豫想を遙かに絶した結果を伴つた點に於いて特徴的であつたとし、一應戰爭經過の説明に移る。通例此の點で原因論が述べられる譯であるが、著者が單にナシヨナリズムの戰爭（六十一頁）であるとして原因

論に殆んど觸れてゐないのは興味深い所であらう。戰爭の經過に關しては、シュリーフェン作戰の經過と失敗、ロシアの脫落、アメリカ合衆國、及び英自治領の宣戰及びウィルソンの理想主義の指導力以外にはさして目新しい所はない。戰爭の終結に關しては、ウィルソン、クレマンソー、ロイド・ジョージの指導力特にウィルソンの理想主義とその具體化の困難を擧げ、同盟國に對する過大な條件は、その條件及び規定の後に證明される永續性の點より判斷するべきであるとし、何れにせよ、ヴェルサイユ條約は非實際的（八十頁）であつたとしてゐる。トムソンは更にヴェルサイユ條約そのもの、批判とパリに於けるピースメーカーへの批判は嚴密に區別されるべきであり、兩者を混同することは歴史の正確な判斷を迷はすものとしてゐるが此れは味ふべきこと、云はれて好い。戰爭の社會的影響に關しては、資本主義の國家化と共に社會主義の國家化が行はれたとした後、ヨーロッパとアメリカ合衆國の經濟事情、人口構成、婦人の社會的地位の變動に觸れ、多くの國際的協調機關が生れると共にヨーロッパの舊王朝制度が懷滅してデモクラシーの勝利が立證されたと指摘する。しかし大戰は政治的には結局國際聯盟と云ふ或る種のミステイクと右翼とボルシェヴィズムを生んだと云ふのがトムソンの結びである。第三章第二次大戰前の時代に於いて先づトムソンは、社會主義の分裂―議會制と一黨專政制を時代の明瞭な徴候と見做し、特にソヴェッ

ト・ロシヤの誕生、生成を重視し、そのヨーロッパに對する影響とファシスト權力の抬頭の一種の必然性を説明し、それ等がナシヨナリズムと結びついてゐる點を重視してゐる。次いでトムソンは國際聯盟が皮肉にも自由主義、デモクラシーの使徒ではなくナシヨナリズムの使徒に轉化し、一九一九年當時のデモクラティックな國民は平和愛好的であると云ふ自由主義思想の前提は笑ふべき幻想であつたとして聯盟は、要するに、體のよい國家の利益保護證體であつたと述べてゐる。大國の加盟してない聯盟はせいぜい聯盟規約の守り役しか果せない(一〇二頁)と云ふのがトムソンの云い分であらうが、穩健とは云へ矢張り聯盟の非現實の一面をよく衝いてゐると云ふべきであらう。トムソンは此の聯盟の非現實性とヴェルサイユ規定への不滿が集團安全保障を生み、國際緊張を促進する重要な原因と見ようとしてゐる(一〇六頁)譯

であるが、共に正肯を射た解釋である。トムソンは次いで中國、日本、ソヴェット、の國家主義的動きとソヴェットの急速な發展と並んで、極東及び太平洋に於ける舊來のバランス・オブ・パワーが急速に變つた経過を述べて續いてウォール街に發する世界的な經濟恐慌を一覽する。賠償に始まり、農産物生産、需要の世界的規模に於ける説明に本項のも極めて要領の好いものであり依存關係に立つ近代世界の映像は極めて明瞭と云へよう。續く兩大戰間に於ける思想的文化的説明は全般的な傾向の説明としては要を得

たものであり、創造的な精神が凡ゆる分野で失はれてゐるとしてゐるは今更説かれるまでもない所であらう。シイド、サルトルよりエリオット、ヴェルチャエフ、デューワイに至る説明はいさゝか盛澤山の感があるが、その傾向、潮流の説明は他方原子力研究の發展の記述と共にそつがない。

第四章は一轉して一九二九年より三九年に至る極めて要領を得た世界の政治情勢の説明に費やされて居り、先づ單一政黨國家としてナチスが描かれてゐる。ヒットラー、ムッソリーニの全體主義國家に關しては、その生成よりも性格運用の説明に重點が置かれて居り、廣い意味に於いては(一二九頁)、十九世紀流の普通選舉制の所産であるとされてゐる。日本を含めてのファシスト國家は要するに「ヌイサンス・ヴァリュウをプールの」(一二三頁)ことによつて相互に獲物を得ようとして「樞軸」^{アキス}を設け、特にソヴェットの聯盟加入は著しくドイツ、イタリヤを刺激したが此れ等は又反つてソヴェットのヨーロッパとアジアに二又かける動機にもなつたとし、ソヴェット外交の本質を一應えぐつてゐるが、此のトムソンの解釋は却々含みのあるものと云えよう。トムソンは更に全體主義國家の利害は各々特有の世界觀につながりがあるものとして第二次大戰は結局、第一次大戰がナシヨナリズムの戰爭であるのに對して、イデオロギーの戰であると斷じてゐるが、此の見方は確かに事實の一半を傳えてゐるものと云えよう。(一

三四頁) 次いで人民戦線、アンシユルス及びアメリカ合衆國の動向の分析を経てトムソンは全體主義國家とデモクラシー國家の對立を説くが此の邊の説明はより詳細なものが欲しい。ナシヨナリズムとソシアリズムの混融に關しては、既にトムソンは鋭く説いてゐるが本章に於いては更に詳しく論ぜられて居り、此の近代特有の史的所産の奇妙な結合は今更吾々に近代世界の複雑性を感じさせるものがあらう。一五一頁に始る國際的な協力機構の發達と各大陸内諸國のブロック的結合も近代特有の動きであるが、一九二八年のハヴァナ會議三二年のオッタワ會議の動きは興味のあるものであり、又國際間の協力を求めてゐる聯盟精神の缺如を特に條文を擧げて説明してゐるのは裨益する所多大と云はなければならぬ。トムソンが特に聯盟精神の忘却を指適してゐるのは、恐らくトムソンの史家としての一つの視點を表はしてゐるものとして注意すべきであらう。トムソンは、此の協調精神の没却こそ世界の無秩序を將來した重要な原因として見てゐるものと思はれる(一六二頁)。一九三九年のヒットラーのポーランド進撃に始まる第五章は一九四五年に至つてゐるが、此處に於いても著者は戦争の性格が極めてイデオロギーに根差したものであることを強調して居り(一六九頁) 殆んど大戦はナシヨナリズムの面を持ち合はせてゐないかの感じを與えてゐるが、此れは恐らくトムソンの最も強調したい所でもあらうか。戦争の持つてゐる多面的性格

を今少しく述べて貰いたいと思つたのは筆者一人ではあるまい。トムソンは次いで太平洋戦争よりベエヴァリツチの社會保障に至る廣範な動きと事象を説いた後、ヒューマニテイ、平和、侵略戦争の計畫に對する戦争犯罪の處罰を擧げて戦争のコースから世界史に對する最重要な概念が生れたとし、國際法を弱めるよりは寧ろ強化する傾向のある世界史上の重要な新しい事實であつたと述べてゐる。トムソンの史的傾向も恐らく此の邊に濃厚に表はれてゐると云つてよいであらう。次いでトムソンは、大戦の交戦國に於ける尨大な損害を述べた後、新しい勢力均衡が生れ所謂西歐體制とソヴェット體制がドイツ、日本等に變つて戦後のイニシアティブをとるに至つたとし、英連邦の衰退及びアジアに於ける廣範な植民地革命の史的意義を強調して章を終つてゐる。第六章は此の二大勢力以外の云はば第三勢力圏とも云える中國、インドの抬頭とマーシャル・プランに始まる世界經濟の新しい相互依存關係の動きを見つめ、アフリカ、中近東に於ける活潑な民族主義と相俟つて來るべき新しい、世界史の構想が抱かれるべきことを暗示してゐる。著者は最後に政治經濟の相互依存と協調を説くと共に相互の謙讓によつて人類の當面する困難な問題が解決されるべきことを念願してゐるが、これは又吾々にとつても共通の念願でもあらう。卷末のビプリオグラフィは簡單ではあるが、立入つて研究する者にも初心者にも便利であり、全體を通じて近代世界史の記

述としては、此の程度の頁數では先づ出色のものであり、又最近世の事情の解明には最も適當したものであらう。又、卷頭に於いて著者の求めたポイントは大體に於いて云ひ盡されてゐると思はれる。全卷を通じ終始イギリスは控えに扱はれ、アジア、近東ソビエトに余分に頁が割かれてゐるのも最近の一つの傾向とも云ふべく、又恐らく此の形が最も最近の世界を描くのに適當した形ではあるまいか。著者の説明は史的であると共に又極めて論理的であり、此のため文章から受ける印象は明快であるが、反面稍理論めいたくどい箇所も散見される。歴史を書く場合、此れは當然出會ふ問題ではあるが、本書の場合、決して煩雜さを加えてゐる譯ではない。著者を導いてゐるものは強いて云えば理想主義とも云えるものであらうが、史家としての必要な實證性及び軟な感覺は決して失はれてゐるものではない。

(鈴木泰平)

日本原始文化 樋口清之著

アテネ文庫 日本歴史シリーズ 3

昭和三〇年一〇月三〇日發行

文庫版七六頁の小冊子で、

序

第一章 日本文化の起源

一、人類文化の起源と日本國土の成立

二、日本における舊石器問題と無土器文化

三、最早期繩文式文化

第二章 日本の石器時代文化

一、繩文式文化の發展

二、繩文式文化の生活

三、繩文式文化の終末

第三章 日本文化の發展

一、金屬農耕の流入

二、彌生式文化の生活

第四章 原始國家の成立

一、日本原始國家成立前後のアジアの文化

二、日本原始國家の成立

結論

と四章と序、結論よりなり、日本文化の起源から國家の成立までを、この小冊子に興味深く、そして要領よくまとめられた點、敬服するところであるが、繁忙な著者が短時日にまとめられたものであるためか、その前半の章にはかなりの誤謬が指適されることは、この好著に甚だ残念な點である。著者がなお多くの時間と余裕を持たれ、周到な準備のもとに執筆されたならば、近來になり快著になつたであらうと惜しまれる次第である。

序において、戦後十年の日本考古學研究の進捗狀況は過云半世